

令和8年産 コメ通信

第1号（令和8年3月11日）

【発行】

北秋田地域振興局農林部農業振興普及課
（電話：0186-62-1835）

健苗を目指して適切な管理を！

1 播種の準備

【播種量及び育苗日数】

- 播種量と播種日は、田植え予定日と苗の種類から逆算した育苗日数に基づいて決定します（参考：図1）。育苗の目安は、表1を参考にしてください。
- 管内では、中苗と稚苗の中間の播種量（110～160 g/箱）で播種している例が多く見られます。また、播種量が稚苗に近いものの、育苗日数は中苗に合わせている場合もみられます。老化苗にならないよう、育苗日数を決定しましょう。
- 高密度播種育苗は、育苗期間が長い場合にムレ苗や老化苗が生じやすくなります。作付面積が大きい場合は播種作業を複数回に分けて、田植え作業まで計画的に行いましょう。

表1 育苗の目安（70株/坪）

	中苗	稚苗
播種量（乾粳）	100 g/箱	180 g/箱
育苗日数	35日	25日
葉数	3.5葉	2.5葉
草丈	13～15 cm	10～13 cm
使用箱数	27箱/10 a	20箱/10 a

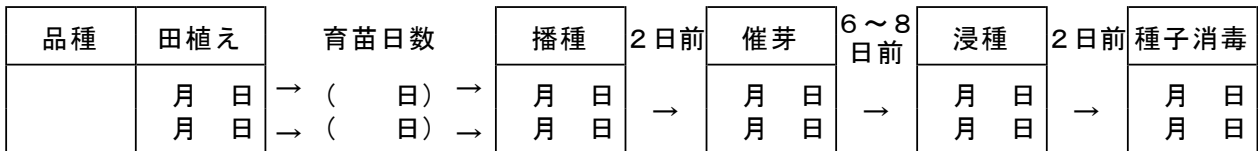


図1 育苗計画の考え方

2 種子消毒と浸種・催芽作業

【種子消毒から浸種までの流れ】

ばか苗病やもみ枯れ細菌病等防除のため、図2を参考に種子消毒や浸種の注意点を再確認しましょう。 ※採種ほ産の種子は、塩水選の必要はありません。

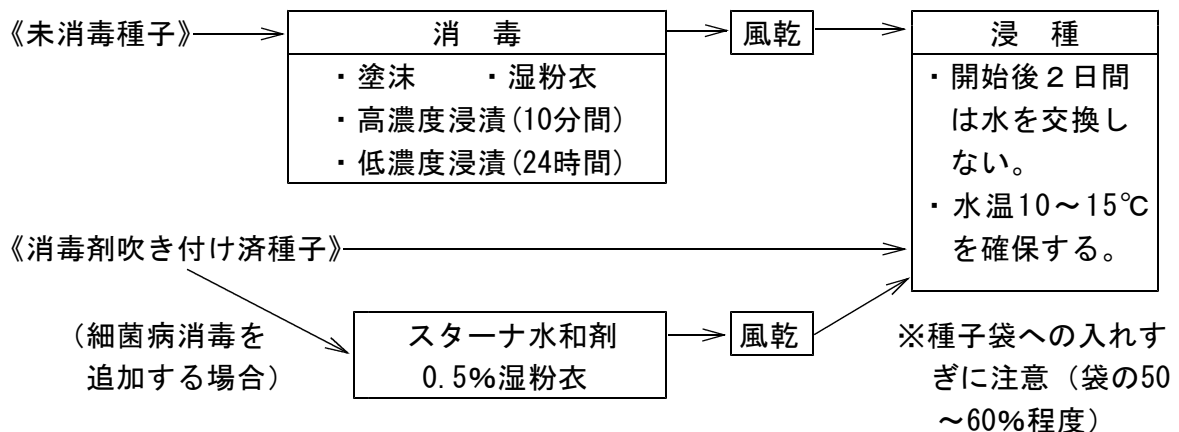


図2 作業の流れ

【種子消毒から浸種までの注意点】

(1) 作業環境

- ・ 周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、種子予措を行う作業場所やその周辺を十分に清掃し、浸種～催芽時は容器にふたをしましょう。
- ・ 浸種と催芽に使用する容器等は、使用前及び品種や消毒方法が変わるごとに十分洗浄します。
- ・ 複数の品種や消毒方法の異なる種子は、同じ容器で浸種、催芽しません。また、採種は産種子とそれ以外の種子も、同じ容器で一緒に浸種、催芽しません。

(2) 消毒時

- ・ 浸漬法により種子消毒を行う場合、防除効果が高めるため薬液の温度は10～15℃とします。浸漬開始時は水温が15℃になるようお湯で調整します。
- ・ 薬効を安定して発揮するため、いずれの消毒方法も処理後に必ず風乾します。

(3) 浸種時

- ・ 浸種の水量は、種子容量の2倍程度（種籾1kg当たり水量3.5L）とします。
- ・ 10℃以下の水温で浸種すると種子の休眠が深まったり、種子消毒の薬効が不安定になる場合があります。浸種温度は10～15℃を確保するように努めましょう。
- ・ 浸種期間は水温10℃で6～8日、14℃で6日程度とし、種子消毒剤の安定した薬効を確保するため水交換は2～3回とします。また浸種開始から2日間は、種子消毒の効果を高めるため、種子袋を揺することや水の交換をしません。
- ・ 浸種終了の目安は、籾殻を透かして胚が白く見えるようになった頃です。
- ・ 水温を確保するため、できるだけ屋内で浸種します。

【催芽のポイント】

- ・ 袋内部の種子まで均一な温度になるよう、催芽前に36～40℃の温水で湯通しを行います。
- ・ 催芽は30～32℃で行い、芽の長さはハト胸程度（催芽長1mm）とします（図3）。芽を伸ばしすぎると損傷が多くなるため注意しましょう。
- ・ 前年の登熟期間が高温だった場合は、種子の休眠が強い傾向にあります。催芽時間や温度に注意して適切な管理を行ってください。

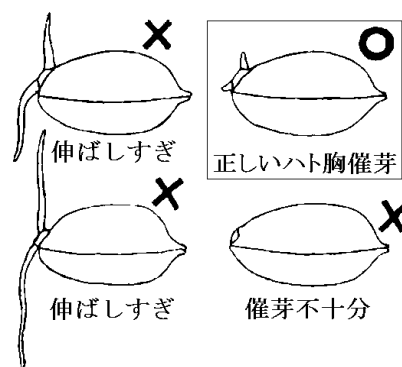


図3 催芽の例

【その他】

- ・ 生物農薬（タフブロックやエコホープDJ）を使用する場合は、ヘルシード剤やテクリード剤、スポルタック剤との体系処理を行うと生物農薬の防除効果が低下するため注意してください。ただし、スポルタック剤はタフブロックとの体系処理が可能です。また、苗いもち及び苗立枯病防除のベンレート水和剤や苗立枯病防除のダコニール1000、ダコレート水和剤による播種時処理も生物農薬の防除効果を低下させるため注意して下さい。

3 播種作業

【床土等の準備】

- ・床土の最適pHは5程度です。pHが適正でない場合、苗立枯病が発生しやすくなるため注意が必要です。
- ・床土にタチガレエースM粉剤を混和する場合は、作業時期に注意しましょう（参考：4 苗立枯病の防除対策）。
- ・苗箱と苗床に隙間があると箱内が乾燥しやすくなり、苗の不揃いや葉焼けの原因となるため、苗床は均平にして苗箱を密着させるようにします。

【播種時の注意点】

- ・播種機の作業開始前に播種量を確認し、適量の種子が落ちるよう調整します。
- ・播種時のかん水が不十分だと出芽不良につながるため、十分にかん水します。

4 苗立枯病の防除対策

表2 苗立枯病の防除に使用する農薬

使用時期	農薬名	希釈倍数	箱当たり散布量	苗立枯病菌の種類					
				ピシウム菌	フザリウム菌	リゾーパス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤	—	10～15 g	○					
	タチガレエースM粉剤	—	6～8 g	○	○				
	ナエファイン粉剤	—	6～8 g	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤	4,000倍	500 mL	○					
		8,000倍	1,000 mL						
	ダコニール1000	500～1,000倍	500 mL			○			
	ダコレート水和剤	400～600倍	500 mL		○	○	○		
	タチガレエースM液剤	1,000倍	500 mL	○	○				
			1,000 mL						
	ナエファインフロアブル	1,000倍	500 mL	○	○	○			
		2,000倍	1,000 mL						
	ベンレート水和剤	500倍	500 mL		○		○		
1,000倍		1,000 mL							
ランマンフロアブル	1,000倍	500 mL	○						
発芽後	タチガレエースM液剤	500倍	500 mL	○	○				
		1,000倍							
	ナエファインフロアブル	2,000倍		○					
	バリダシン液剤5	1,000倍					○	○	
	ランマンフロアブル	1,000倍		○					

- ・タチガレエースM粉剤は、播種時にダコニール1000またはダコレート水和剤をかん注する場合、播種5日前までに床土に混和します。
- ・床土にオラクル粉剤、タチガレエースM粉剤またはナエファイン粉剤を使用しなかった場合は、播種後覆土前にオラクル顆粒水和剤、ナエファインフロアブルのいずれかをかん注するか、播種時または発芽後にタチガレエースM液剤、ランマンフロアブル（使用時期は緑化始期まで）のいずれかをかん注します。

- ・タチガレエースM液剤とダコレート水和剤の播種時同時かん注は薬害（生育抑制または育苗後期の葉の黄化）が発生することがあるため避けます。
- ・オラクル顆粒水和剤、タチガレエースM液剤またはランマンフロアブルはダコニール1000との同時かん注、ナエファインフロアブルはダコレート水和剤との同時かん注が可能です。
- ・ベンレート水和剤の播種時使用は、いもち病の育苗期防除も兼ねます。
- ・ダコニール1000やダコレート水和剤の発芽後の使用は防除効果が劣るほか、発根が抑制される場合があるため、播種時に使用します。

5 いもち病の防除対策

昨年は育苗段階からいもち病が発生し、葉いもちの発生時期は早く、穂いもちの発生も多くみられました。本田におけるいもち病の伝染源は、育苗施設から本田への発病・感染苗の持ち込みや、乾燥状態で冬を越した稲残さ（稲わらや粃がら）です。稲わらや粃がらを育苗施設の近傍や施設内から確実に撤去しましょう。また、**育苗期のいもち防除を必ず行い、本田へいもち病を持ち込まないように努めてください。**

使用する剤について不明な点は、JAまたは農業振興普及課までお問い合わせください。

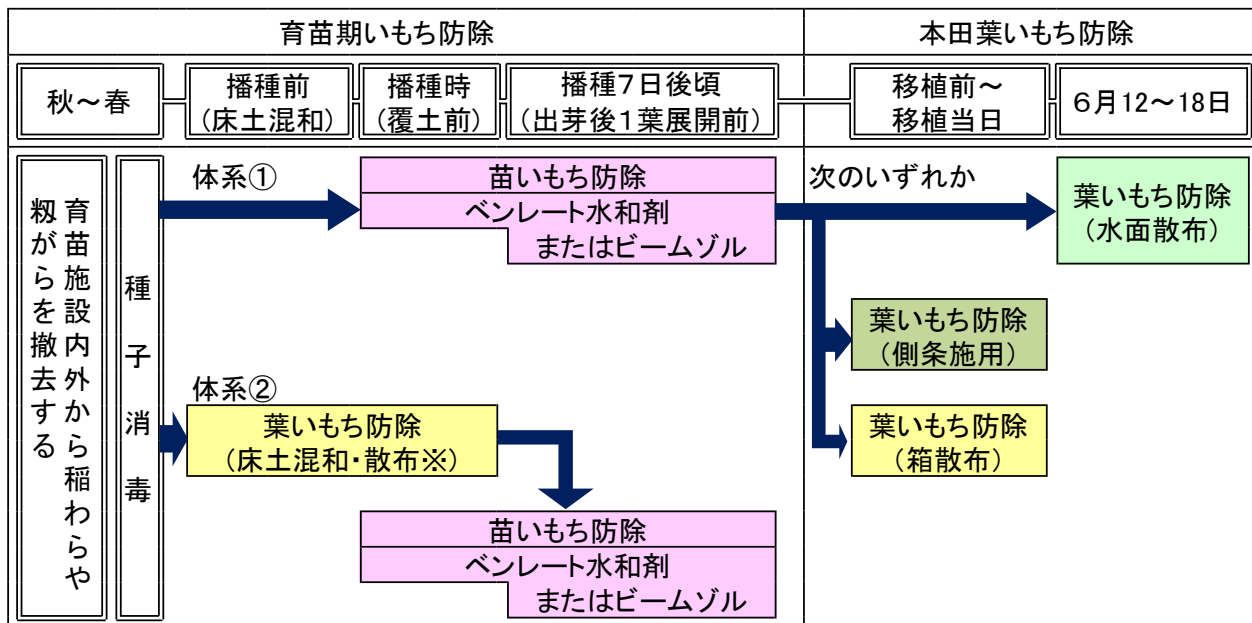


図4 いもち病の防除体系

【防除のポイント】

- ①稲わら、粃殻を撤去し、作業環境の衛生管理を徹底しましょう。
- ②**育苗期防除（ベンレート水和剤やビームゾル）で本田への持ち込みを回避しましょう。**
箱施用剤による本田の葉いもち防除は、使用時期や使用方法を守り、防除を徹底してください。高密度播種苗の場合は使用料に注意してください。
- ③余り苗は強力な発生源になるため、泥の中に埋める等して早期に処分しましょう。

◆令和8年も斑点米カメムシ類防除を徹底しましょう◆

管内では昨年も斑点米カメムシ類の発生が多くなりました。気象条件により今年も多発する可能性があります。畦畔や本田内の除草に加えて、薬剤防除を適切に行うことで、斑点米カメムシ類被害の軽減に努めましょう！

問い合わせはJAまたは農業振興普及課まで ～次回発行は4月上旬頃～